



志  
保  
之  
利  
五  
篇  
本

信 5  
508  
61



45  
508  
卷 61



三  
一  
り  
ん  
し  
む

○聖人大公無我 鎮天地之氣象 後人カガリ區々小智  
自私盡夜圖為無非 一身イツ佚欲之計 且其氣象  
之卑陋也ニシヤ 讀書錄ヨクシヤシキ

君子之出處當脩其身而聽之天 彼卑汚為賤  
搖尾乞憐攀援勢要以鳥進者 果何心哉正

聖賢の氣象 出處を見て我を省ふといふと 恥  
しき事なり 是を恥みし 何ぞ聖賢を  
その如く 徳に功利名聞を事して 老るに至る  
事 秋あり口に

聖人之心如天物有違忤者 終無我怒也 叔氏

極言其神妙無方慈悲忍辱至於一有毀謗其  
書不尊其教者報之以種種之罪又何量之小  
而心之シテルヤ牧那ウエトモト上曰

もつて佛經と看よ譯人の氣家と我聖人の氣  
象と其量の小大明白也ありしに是皆譯者の  
意しつて經と作しし故一を抄隨の語多ハ  
るべき譯人として胡人宮聖神の道に等し  
し人ヤ是林家筆紀也

○我神皇の御執向うハ天の香語カガユ天の羽々矢ハハヤ此谷  
傳者コトワケと云地神大己貴オホニギハヤヒ年の弓天と生ナマ生ナマ矢ヤと云

是亦呂授の秘りヒソカニ正ただしく弓矢と作ツクリし事ハ經請キヨウジウ天皇の朝歟  
弓部ユ雅彦造ノリヒコノツクリ知部チ國名クニナ作ツクリ矢ヤ  
倭鍛部ヤマトノカ天津ツクシ矢浦ヤウラ造ツクリ鍛カ

これ旧事記及び日本記に及ぶ事無仁帝其皇子  
五十瓊敷命に弓矢と賜ひしハ皇子武官の始

○武科試牘八集ミチノコト卷ハ清の青溪朱堪廉園論定の

○武書也予讀之武と講コトしつるを委タテマツく味多し  
幸に我家藏イヘに備

○ナキナタハ長刀の轉語マカと云し實マコト薙欽也日本記モ  
欽マコトナタナタ

訓ス ヤゲラ今櫓の字を用ゆ 兵庫をヤクラと

訓セリ 兵ハモノノグと訓して凡  
ラ六千又の惣名なり

○志水氏ハ菅原の姓ありて右大將頼朝小近侍男  
小八幡官の例幣使を勤し其裔中世おつて  
八幡山下清水小住と阿佛とよぶ者に子多かりし  
嫡子凡衛門尉国元ハ家と継て清水と稱て二男  
僧圓哲言ハ正法寺の開祖あり 源定康寺領の  
田と寄 国元  
の子と高田孫右衛門尉宗久と稱て其居石清水に

隣りし故清の字と避改之志水と書し宗久ハ代の  
孫志水加賀權守宗清ハ 相應院尼の父あり家の  
紋梅輪内 ウメノハ  
カ

○三列碧海郡平田庄上野の城主上野右衛門尉物部  
照氏ハ新田左兵衛伏羲兵に属して戦功あり其  
裔より荆と以稱号とし平岩主計頭親吉等皆  
此後胤あり

○三列園崎大木寺 浄土宗  
西小義 ハそのうも西卿彈正凡馬尉長

元園崎の城と築什一 時建之菩提道場と云々  
今寺産一百石あり

○三列浄土宗山西檀林三所 山中法藏寺 岩津妙心寺  
中嶋宗福寺

○尾列西山檀林三所 飛保曼荼羅寺 部田祐福寺  
熱田正覺寺

○紀列回流の檀林カトヨリ楯取惣持寺 京師の本寺一所禪林  
光琳寺と合て 西山義九所也 此内三列の檀林は西山流の内証草義なり

○浄土宗関東檀林十八所 増上寺芝今八所一也

光明寺鎌倉 壽経寺小倉才座也 勝願寺鷗 常福寺連

弘経寺沼飯 大巖寺生 蓮磐寺熱川 弘経寺結城

東漸寺小 浄國寺岩 大善寺瀧 大念寺戸

大光院新田 幡随院神田 善導寺館林 靈巖寺岩

靈山寺湯嶋今移改中

名越善導流義檀林三所

回通寺大 専称寺小

廬山流義 大阿彌陀經寺 泉列塔号加蓮社

開祖六乘澄日菩薩 後村上院初證也 石智演上人 源義氏の裔孫  
泉列刺史義興の男 初ハ鎌倉光明寺常譽上人  
人の浄土宗と傳 自北条氏 後に元朝に入りて廬  
山東林寺の優曇普度大師に見く惠遠の  
法脈を継て廬山義の浄土宗と号す 秘藏  
蓮社

○或曰寺門の二王といふ多聞持国の二天の事 天王と 秘藏

分破畧して 王といふ 兩金剛と二王といふは、と云金剛の事主

法念經小所謂密跡金剛神ありて寺門は造立と  
ありてハ 秘藏記等に説あり

○俗説云 竈神ハ安閑天皇の御宇に江列田賀郡由良

里の士民夫婦を祀と云 此説據ありと人云、古俗凡土記の説に 似たり 蘇くハ幸の神の初と云

○沙石集聖徳太子の説を謀計雖為眼前之利潤

然當佛神之罰正直非一旦之依怙必蒙日用

之衰、これ上代の文法も亦ども、凡て厭ふの語あり

を但一是と天照大神の詔宣とハ、その時代をいふを

一神の事とハ、三社詔宣とハ下部兼俱が作す事

ありて、前記辨も、いふこと



多く見ゆる中に長野氏姓イノカミハ石上イノカミと云

○今川義元我東尾と畧せし時織田信長熱田の

宗詣し又春敵門ツラ出蛇塚を経て井戸田小

行山崎より野並と魚石鳴海とて大子根小陳

流し是より桶ツケ白ハク多タく衝入して勝利を討つ

ときいはたもと熱田田治アノのチあり

○珠敷の梵語鉢塞莫名義集より南蠻契利斯キリス當

念教と崑塔子コウカより由佛法ユフホウと天主法テウシツと似て同ト

西洋の法あり又譯語ハ一々ありぬ多し名義集

小珠椎と鐘ツヅミとと磬ツヅミととツヅミ也ツヅミ鐘ツヅミと磬ツヅミ二物小あり

それとそれとぬおしツヅミぬ多し是とて信ツヅミ

ありありしやツヅミ林家筆記

○宝永六年三月廿一日より四月八日ツヅミ至りツヅミ南郊ツヅミあり

大佛殿落慶供養の時ツヅミもく人ツヅミの送ツヅミり

一紙ツヅミのツヅミ

堂高二十五間東西二十八間七尺南北二十五間四尺  
瓦敷十三万二千六百六十枚





大佛殿華梁銘

元之の御之令宝永五年... 大佛殿華梁銘... 大佛殿華梁銘... 大佛殿華梁銘...

右殿燒毀梵像儼然或聞或見靡不醋憐欲興

久廢遍募衆緣始運斤斧廣設齋延般師五百

淨侶一千七慶之德海內爭傳仰祈 世主膺

草綿綿民安固泰億萬斯年

元禄元四月... 吏前務正通德寺所建銘也

別當二品法親王海深和尚勸修寺

長吏蓮華光院道恕大僧正

大勸進龍松院公慶上人

元禄元年八月上人位  
宝永二年七月上人位

天和三年公慶發與後之志上奏貞享元

年以來募四方修佛像

元禄元年四月二日

始僧侶一千人

通氏五  
百負三

同十四年丑  
月十二日

始東大寺大佛長官從四位下九人史小

宝永二年四月止棟

萬代洪基以湯し無し虞一旦翻成華藏史

南都舍那大像



千年古佛巍く不動重新く出紫金軀

大佛及供養のりきえを以て生きたるを業  
良く存せしめてやとくを

叶ひの道やふその後れは重極りあを首れふに何れん  
彼寺々華嚴とありしゆりゆりせ如日し出先照高小  
の意とありて佛布施小書海つくりん  
事務こめてゆりしはしきまのりた日しうりふまればはま

。櫛し元の木 櫻うの木の木 糖とうの木の木 柿かの木の木

。魚鳴草うのりそ 萩草は 山菅や 指統草さ

水葱み け敷けの文字なの史本集しの多し

。費田ひ神し多た寺じ愛あ深しん塔た六ろく曹そう臣しん秀しゆ親しん再さい建けんせりてりり  
破壊はしてああくくなりしそくく婦ふのちち流りゅうしし時じスス

人書りぬるに護朽葱花形の沼小慶長十年丙午  
奉行行桐東市正旦元の文字有りしをいふ人々  
く作らるる古法の絶えたる所にある文字ハ  
そのもといひ記しあつてすなり

○妙法蓮華經論貫巻を明人古六の智旭所述あり  
三大部等此書を見よ人のために答して記せり  
○嗚呼農夫蒔播耕辱歩度の辛苦は故て子親  
来非と措て上帝に謝し給へり故や我人一飯と

食らるる毎に耕夫餉婦疲馬頓井の勞春炊供給の  
勿と思念してこれと報むべし又蚕婦織女採桑  
繰繭理絲卷織及載縫の功夫幾回も故后妃とて  
予を戒めて躬桑を蠶律と勤むれば何況ヤ  
吾儕一衣と服らるる毎に自省して其勤を謝せざん  
や我輩常に葛虫衣の煖寒を計り飲食は身美と撰  
て耕民蚕婦の辛勞を以て其況やこと  
君禄と誤りて媪飽の備を以て報國の志なくして

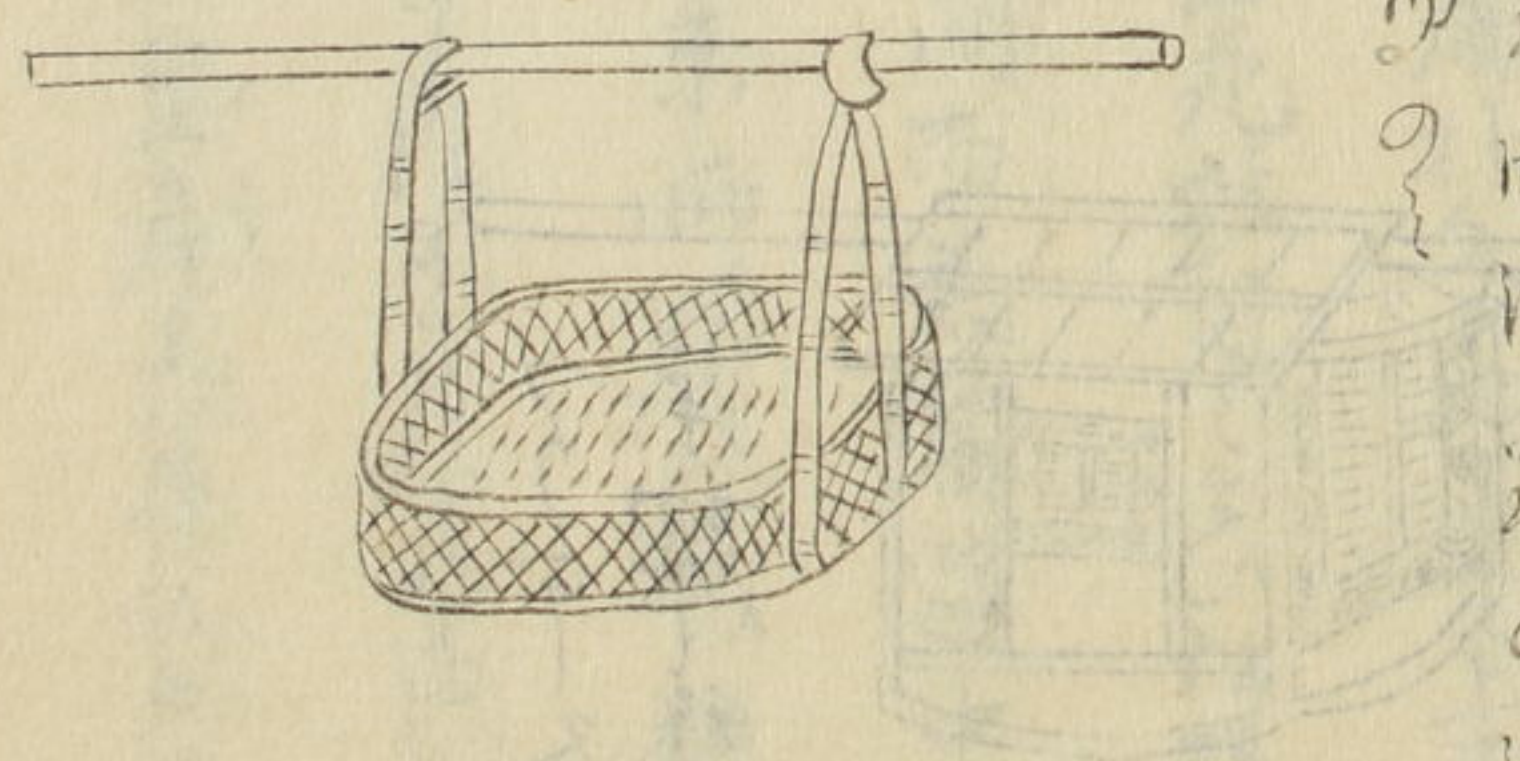
起居恒々安と偷むことして此の眾人小非とや衣  
 食の<sup>し</sup>に何<sup>ん</sup>以<sup>て</sup>弟<sup>を</sup>完<sup>く</sup>凡<sup>ん</sup>兩<sup>を</sup>と覆<sup>ひ</sup>い器<sup>什</sup>什<sup>を</sup>昼夜に  
 用<sup>ひ</sup>い自<sup>漢</sup>マ<sup>を</sup>れども鮮<sup>を</sup>を食<sup>ひ</sup>い自<sup>塩</sup>焼<sup>を</sup>れども味<sup>を</sup>  
 備<sup>へ</sup>て父母<sup>妻</sup>妻子<sup>と</sup>養<sup>ひ</sup>い奴<sup>僕</sup>犬<sup>馬</sup>と食<sup>や</sup>め死<sup>を</sup>  
 送<sup>祭</sup>を奉<sup>じ</sup>て人<sup>倫</sup>の始<sup>終</sup>を全<sup>く</sup>するものこと  
 一<sup>つ</sup>として君<sup>恩</sup>に何<sup>ん</sup>き<sup>ら</sup>いな<sup>ら</sup>ぬ<sup>に</sup>これ<sup>を</sup>とれ  
 て徒<sup>ら</sup>に後<sup>を</sup>送<sup>を</sup>を<sup>せ</sup>い<sup>し</sup>海<sup>色</sup>は深<sup>く</sup>し<sup>る</sup>名<sup>を</sup>と<sup>し</sup>一<sup>つ</sup>  
 身<sup>を</sup>を先<sup>ぶ</sup>つ<sup>て</sup>祖<sup>先</sup>と泉<sup>下</sup>不<sup>辱</sup>し<sup>る</sup>影<sup>を</sup>い<sup>は</sup>禽<sup>獸</sup>と

とと<sup>り</sup>たり自<sup>發</sup>深<sup>者</sup>て過<sup>犯</sup>と<sup>も</sup>あ<sup>る</sup>れ一旦<sup>を</sup>人<sup>と</sup>を

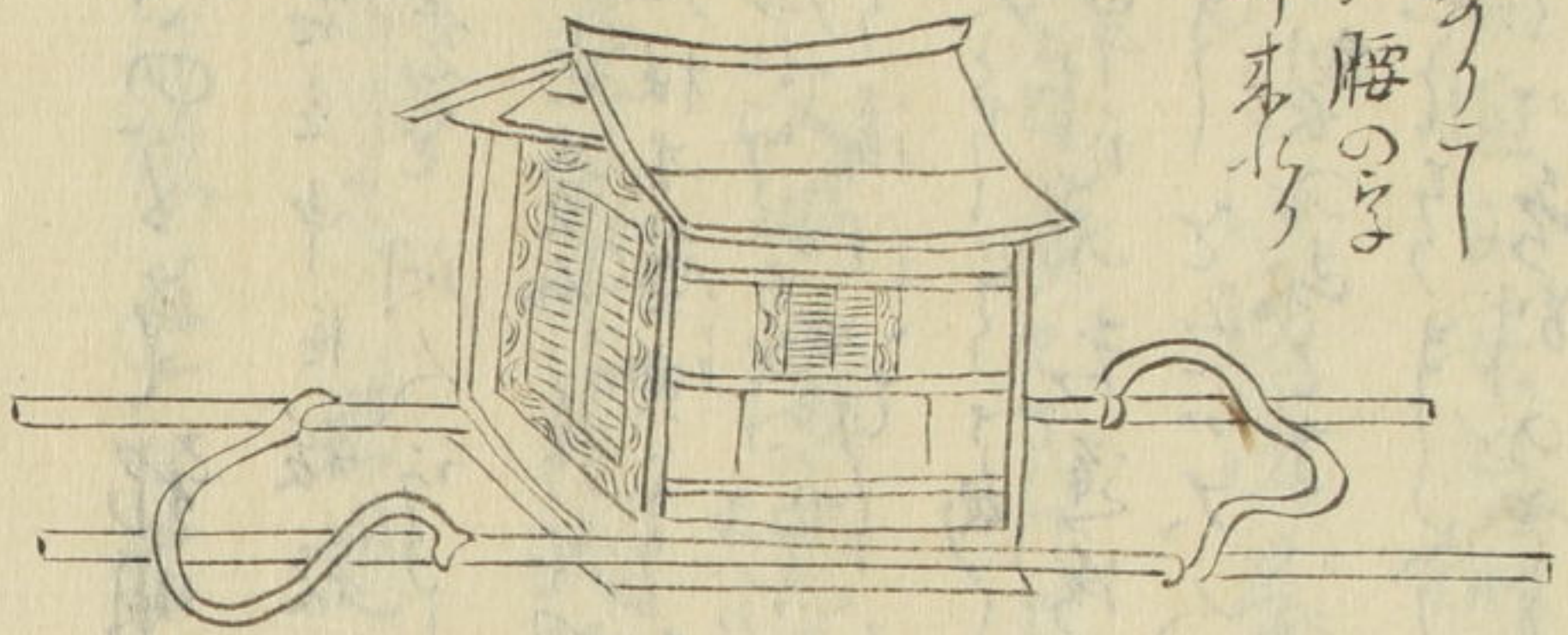
欺<sup>す</sup>の<sup>が</sup>も<sup>も</sup>邪<sup>明</sup>の照<sup>後</sup>と<sup>も</sup>あ<sup>る</sup>れ<sup>ん</sup>や<sup>と</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>か</sup>り<sup>し</sup>也<sup>と</sup>

右<sup>を</sup>中<sup>臣</sup>後<sup>祝</sup>初<sup>と</sup>講<sup>を</sup>に<sup>云</sup>津<sup>最</sup>國<sup>律</sup>最<sup>の</sup>深<sup>意</sup>  
 意<sup>を</sup>同<sup>人</sup>に<sup>し</sup>敗<sup>書</sup>に<sup>い</sup>は<sup>れ</sup>其<sup>の</sup>意<sup>の</sup>

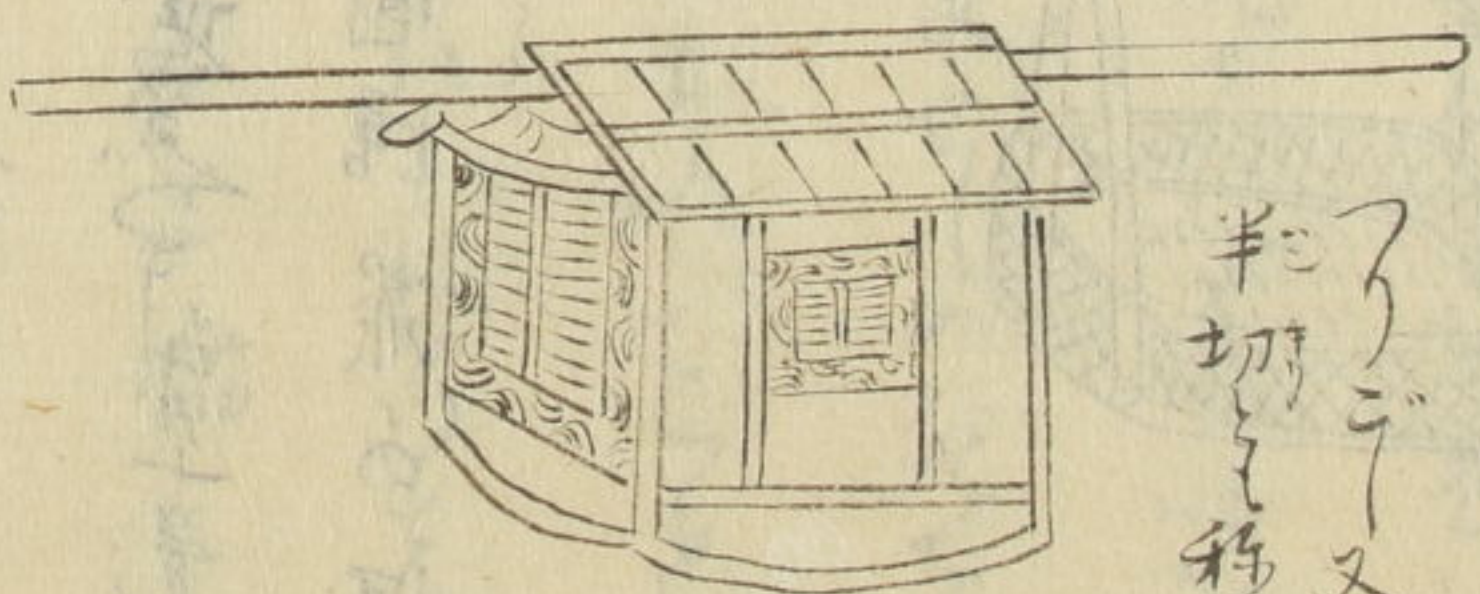
○ 今のを貴<sup>み</sup>り<sup>し</sup>下<sup>つ</sup>り<sup>し</sup>寫<sup>を</sup>毫<sup>を</sup>も<sup>も</sup>た<sup>ず</sup>  
 竹<sup>の</sup>根<sup>本</sup>盤<sup>を</sup>興<sup>り</sup>起<sup>り</sup>後<sup>を</sup>興<sup>行</sup>興<sup>等</sup>  
 等<sup>並</sup>に<sup>い</sup>は<sup>れ</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>か</sup>り<sup>し</sup>也<sup>と</sup>覆<sup>を</sup>  
 物<sup>の</sup>後<sup>に</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>し</sup>ら<sup>ず</sup>か<sup>り</sup>し<sup>に</sup>日<sup>を</sup>不<sup>い</sup>  
 い<sup>は</sup>れ<sup>し</sup>る<sup>の</sup>製<sup>を</sup>り<sup>し</sup>也<sup>と</sup>  
 神<sup>の</sup>早<sup>凡</sup>の<sup>者</sup>道<sup>法</sup>の<sup>は</sup>く<sup>れ</sup>ふ<sup>に</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>か</sup>り<sup>し</sup>  
 あ<sup>ら</sup>ず<sup>か</sup>り<sup>し</sup>と<sup>も</sup>大<sup>人</sup>人<sup>と</sup>も<sup>も</sup>これ<sup>に</sup>め<sup>を</sup>て  
 その<sup>製</sup>衣<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>か</sup>り<sup>し</sup>也<sup>と</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>か</sup>り<sup>し</sup>  
 盤<sup>を</sup>興<sup>り</sup>起<sup>り</sup>後<sup>を</sup>興<sup>行</sup>興<sup>等</sup>  
 此<sup>の</sup>意<sup>の</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>か</sup>り<sup>し</sup>也<sup>と</sup>



腰輿ウヱウヱ  
の訓ハ腰ウヱの字  
より呼ウヱ本ウヱ也



肩輿カウヱの訓ハ肩カウヱ  
より呼カウヱ本カウヱ也  
のやうカウヱにカウヱくカウヱあ  
らカウヱうカウヱつカウヱじ  
ハカウヱしカウヱ宮カウヱ中カウヱのカウヱり  
つカウヱのカウヱぢカウヱぬカウヱ人カウヱのカウヱぢカウヱあ  
らカウヱうカウヱ物カウヱ々カウヱ今カウヱ迄カウヱ候  
のカウヱ夫カウヱ人カウヱとカウヱ之カウヱをカウヱ了  
すカウヱのカウヱ変カウヱ々カウヱ等カウヱ  
物カウヱにカウヱのカウヱら



アウヱリウヱトウヱ又ウヱハ  
半ウヱ切ウヱとウヱ移ウヱす

。凡我國之より錦と織所京原錦小路及び近國錦織師  
首皆倭錦と織所也大神宮御將裝束小車屋形等の錦あり  
今やまことにしきそし御車をとも用物甚角掛るゆへに上右  
の如く凡顔府續編に日本代麒麟錦金花炫目と云ひ杜陽  
雜編に我國明霞錦光耀芬馥五色相間而羨麗過中  
國之錦ありと云ひ我功牛と知るべし糸師所織袍  
衫等の穀綾等より錦羅花綴見りらうにまらねぬ也  
我神代稚日女尊神之御服と織日本高皇產靈尊の如く

栲幡千千姫と稱し栲幡の天孫の后浪穗之上織経栲也は  
事迄正史いへる是婦人の職分を記して後世に示すの如  
大神宮御神宝の第一緒染麻首拵等皆織経の器  
なり後世女子驕淫して天職を勤む者少し定戒不  
可くんや

○我北堂機と見子婦と省て曰細織と稱し其條理と  
違イシてイシるありあは綜ありて幾礙て核と連イシぎし不能  
しと理衆シニ緒直して経緯正一人の行也これに不異

こ又曰細緯カクとありて経クダと緯カクと上下と拵とカクて緯と施  
てカクて拵と拵と経緯と組事カクして幾万敷を分重寸積  
又と為し又と成して始て一縮布の名あり其分丈一旦子  
らむ此等衣之其功と思ふなり又曰今の婦女多ハ帯  
階遊カク手カクにして織経カクと以野早の業カクなり故に故藤原  
樂カクと習いてこれと母家のワヂカクとを亦誤カクとや嫁の前必  
簞カク縮カク糸カク木カクとカク何カクの為カクと凡カク女カクハ紡績織経カクと其業カクと  
布帛カクと作カクて丈夫カクの用カクとを女カクの什器織器カクなり



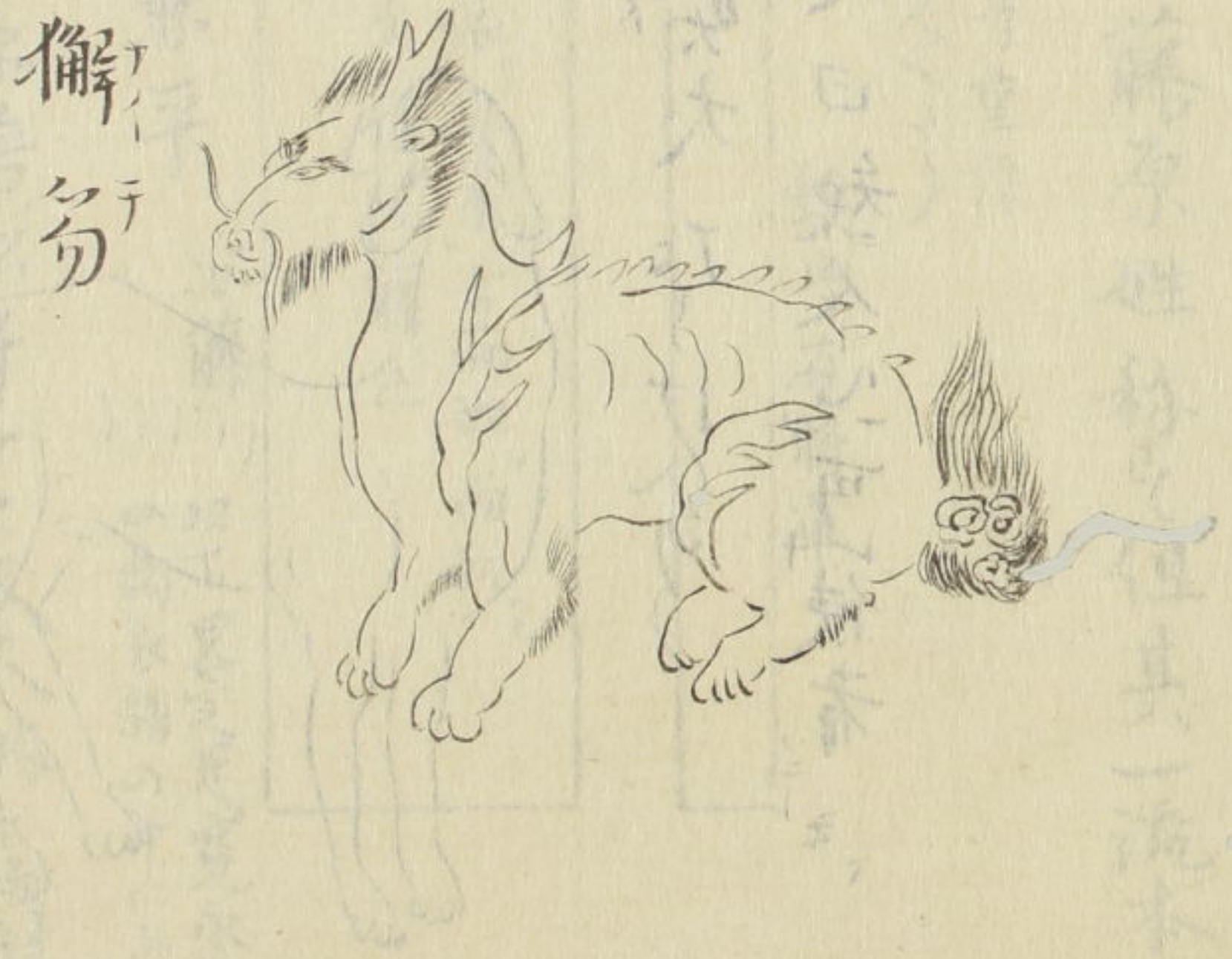


○或河俗之頭寒足熱也予醫書にほめ何の據  
 名曰て若止觀才八世諺曰欲得老壽當過足  
 露首これよりして

○吳邦神祠獅子と置て子代宮門懈多天祿改置  
 外門の金馬街上此洞駝用武の地貌貅と云ふ  
 獄舎の門控ヒヤシ行と作ハそ圖大槩獅子に似たれ  
 バ我玉の人をうしに獅子ありそ之りこれ極歎の  
 形こころとそ徳のゆゑ論衡玉海洛陽記その他書

我社社角あり狗  
 大を懈ハヤシ分角な  
 う天祿改獅子  
 とゆふしりちこ  
 の凡ありこむか  
 そは言篇大の  
 形にしてこふ  
 たりけんなり狗  
 公狼も似て羊と  
 駝歎あり梅  
 唐社が音教の  
 こよんたり  
 獅子と虎豹と

一名天祿一名神羊能別曲  
 直有眾者觸之故宮門置其  
 形



懈ハヤシ分

吟り小石小石形  
と墓所子並又  
好て之を好小  
佛座に獅子と  
用ゆ



整犬たけあり  
説文曰知人心可使者

○安藤氏雨流ありそのに藤原姓称も但其一流本姓

安信姓也安藤對馬守重信等系圖に及く

安信仲磨  
鎮守府將軍

朝任 安藤九衛門尉

鳥羽院武者所賜藤原姓元依安家合四姓而稱  
安藤之紋乾六交廣流押六交後改藤丸

右京 武者所  
兼平 安藤  
以下畧定是寛永御撰の諸家譜の中あり

梅より仲磨八中整大輔安信船守子之又大納言朝平  
の男より了天平勝玉五年入唐彼国大曆五年正月唐

て卒せり我光仁帝宝亀元年なり(二道より)鳥羽院即位  
の年より凡三百三十九年歿其間只二代あり(三)つて定て世  
系と(一)ふ系なり(二)系圖の書に(三)間々(四)の(五)由

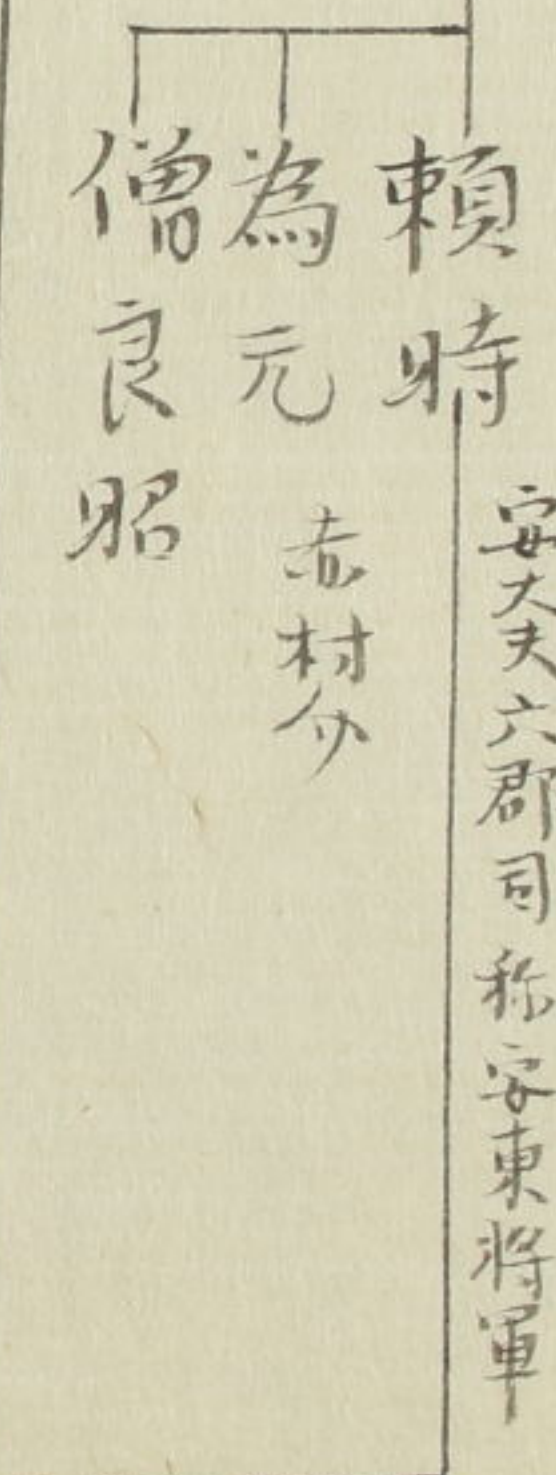
本友對馬守重信の嗣右京進重長ハ本多友四郎ハ  
四ノリシハ是より良ハ別系とありし歟

仲麻呂唐之秘書監左神祇左散騎常寺安南都護等  
に(一)姓と朝名と(二)衡(三)之(四)改(五)終(六)に北海郡開國公に封せり  
是(一)より唐書以下あり(二)其書に(三)又我光仁明帝  
勅して正二品と(四)給(五)た(六)多(七)い(八)る(九)史(十)に(十一)あり

○安東氏譜と梅に神武天皇代御宇長髓彦(一)兒(二)安(三)東(四)國  
に(五)迹(六)れ(七)陸(八)奥(九)濱(十)安(十一)東(十二)浦(十三)に(十四)任(十五)せ(十六)り(十七)各(十八)明(十九)帝(二十)代(二十一)時(二十二)蝦(二十三)夷(二十四)叛(二十五)り  
安(一)信(二)比(三)羅(四)夫(五)に(六)勅(七)して(八)これ(九)を(十)社(十一)せ(十二)り(十三)比(十四)羅(十五)史(十六)陸(十七)奥(十八)に(十九)つ(二十)る(二十一)こ(二十二)に(二十三)安(二十四)司  
か(一)喬(二)安(三)東(四)の(五)し(六)り(七)者(八)官(九)軍(十)に(十一)属(十二)し(十三)軍(十四)功(十五)と(十六)互(十七)依(十八)之(十九)阿(二十)部(二十一)陸(二十二)奥  
臣(一)の(二)姓(三)尸(四)と(五)錫(六)ひ(七)緘(八)と(九)護(十)せ(十一)り(十二)也(十三) 安東之(十四)蓋(十五)一(十六)先(十七)祖(十八)ナリ(十九)濱(二十)安(二十一)東(二十二)浦(二十三)に(二十四)任(二十五)せ(二十六)り(二十七)及(二十八)其(二十九)言(三十)と(三十一)互(三十二)り(三十三)折(三十四)安(三十五)鎮  
東夷の(三十六)号(三十七)歟(三十八)和(三十九)訓(四十)或(四十一)ハ(四十二)ト(四十三)稱(四十四)ス其(一)後(二)喬(三)致(四)東(五)の(六)國(七)乱(八)と(九)鎮(十)を(十一)依(十二)て(十三)將(十四)軍(十五)也(十六)号  
あり(一)仁(二)明(三)帝(四)の(五)時(六)柴(七)田(八)郡(九)大(十)領(十一)外(十二)從(十三)六(十四)位(十五)下(十六)勳(十七)七(十八)等(十九)阿(二十)部(二十一)陸(二十二)奥  
臣(一)豊(二)主(三)等(四)漸(五)盛(六)大(七)多(八)一(九)條(十)院(十一)の(十二)時(十三)彼(十四)後(十五)胤(十六)國(十七)東(十八)松(十九)前(二十)に(二十一)至

て滅せ征し其子頼良其子と安東太郎頼良と之後源頼義  
 名を避て頼時と稱し自安東將軍と名謂と之一作安東將軍

忠頼 安東 頼良 一作惠良 東奥首長 頼時 安太六郡司稱安東將軍



日井 盲人

良宗 安東太師後世或書安藤若伊藤伊東等

貞任 厨川三郎

宗任 烏海三郎

- 正任 黒沢四郎
- 家任 磐井五郎
- 重任 比浦六郎
- 則任 比与鳥七郎
- 女子 アハカ一前 伊具十良平永衛妻
- 女子 中カ一前 百理權大夫藤原経清妻
- 女子 一カ刀一前

右畧書とこれ阿部仲磨と同系にありぬし此阿部  
 安東と稱す前記と系圖朝任の名を以て又

八任の字奥品阿部之阿部姓あり元後人傳て仲磨の  
後之て朝任り阿部陸奥臣の姓外國乃氏を  
こハ姓氏録に載る之續日本後紀多に之あり  
言ハ彼此考て可也

○今の清帝 康熙 左辨將軍某に勅して曰太子を以て天下  
を治へき器に非ざ万歳の後卿位亦即て四海を治平せよと  
將軍謝して曰太子年猶少異日其徳の成を待たまは  
此事中外聞ハ必太子を狂せん臣願ハ輔養して太祖の祭  
と奉したる事とせんて己が家に在りしハ也毎に教  
戒しむるにあつても質も愛していつと之が成れり君

我子に私せむ臣ハ天位を貪む天下宣乱に及やを稱して

左辨ハ老将ありて處々の戦場に武名を顯し天下に  
知れし知臣あり其長七尺餘怪異の魁なり  
帝其像と銅にて模鑄し常に帝座に向りて自武  
備と戒らる左辨酒と好て酔ゆれし近臣ころをた  
帝此帝にして左辨が一盞を飲もては彼銅像の  
首に一穴あり而より一盞を入し終日飲して彼像  
元より酒溢流ふりても碎り色ありしと云々  
上戸もあるゆに云々

○李明の功臣鄭芝龍 日本平三鶴に  
任せり者也 清の大祖順治二年に北京  
に降せし其子鄭成功 平戸にて生  
せり也 永曆帝と云明の恢復  
を謀り帝朱氏を掲いで國姓耶と云い稱せられ永曆二

年 隆列府城と拔し、ナカ奇策とありして泉列等と攻  
破し、同十五年に塔伽沙古に海り、思明に孫清の康熙五  
年大宛にして卒せり、其子錦舎嗣て大宛を承りし、ウウウウ  
く死にり、其子奏舎楯大宛を係り、ウウウウ勢つきて康熙  
二十二年に倭となりて北京に幽せられ、我貞享元年也 近き、我宝永の地  
帝奏舎とあり、何にして望あぶ奏舎とあり、奏舎曰亡君  
旧故皆あし、何と欲せ、只大宛に亡父母の頽墓  
あり、これを省は、定みんと帝や、ウウウウ大宛は、ウウウウ奏舎懐て

大宛にして、其旧宅と尋にあし、ウウウウ首が、ウウウウ  
た、ウウウウあれ、ウウウウあれて奏舎と待し、ウウウウ甚あ、ウ  
ウウウし父母の古墳と、ウウウウ甲にも、ウウウウ圍ウウウウ後して、ウウウウ外  
こ、ウウウウた、ウウウウや、ウウウウやく、ウウウウ束、ウウウウの、ウウウウし、ウウウウれ、ウウウウも、ウウウウ改葬の費に、ウウウウ供、ウ  
き、ウウウウく、ウウウウれ、ウウウウり、ウウウウし、ウウウウた、ウウウウ海、ウウウウ京の、ウウウウ魏、ウウウウ迎、ウウウウく、ウウウウ好、ウウウウし、ウウウウ一、ウウウウま、ウウウウ切、  
て、ウウウウ苗と奏し、ウウウウ啼て曰、ウウウウ臣、ウウウウ既、ウウウウ皇家の、ウウウウ囚、ウウウウり、ウウウウ身と京師に、ウウウウ喪、  
し、ウウウウ願、ウウウウ亡、ウウウウ父母の、ウウウウ遺、ウウウウ骨と、ウウウウ以て、ウウウウ京、ウウウウ師、ウウウウ近、ウウウウき、ウウウウ地、ウウウウに、ウウウウ埋、ウウウウは、ウウウウ是、ウウウウ皇、  
恩、ウウウウを、ウウウウん、ウウウウれ、ウウウウ其、ウウウウ費、ウウウウを、ウウウウして、ウウウウ従、ウウウウに、ウウウウ功、ウウウウを、ウウウウ依、ウウウウて、ウウウウ我、ウウウウハ、ウウウウ一、ウウウウ地、ウウウウと、ウウウウ恩、

賜あり死とも可なりと帝其孝心を感し曰奏舎実至  
孝あり宣異志とく下うに即んや宣大宛小宛して一地と  
知れりも一と即本國に改しはるるれ奏舎并て思誠  
謝し大宛に改る又母の墳墓を改め築て其祀を奉故  
曰七臣皆集て賀奏舎曰我朝の旧臣なり宣清に侍  
りとのぞんや只祖先の墓所を之れ申切ある故存令  
してこいふゆゆ先にもし時我を諱しゆるれ恨に  
不及今もて賀我又悦にあむはははははははははははは

ありしりゝゝ庶民皆罪を謝して臣稱し再ハ大宛一所のまき  
あやむるもとや実孝心の人を感せりむ事古今もみ請  
主即位し今我宝永五年にすりもては甲七年キニセ京省靜  
謐りて万民其徳を稱せり奏舎ハ一方大畝の子孫  
あれやえ洙せりもきをたはひありれりのこもむかく  
まて慈愛を施されし仁政の餘沢ありりり  
右三條ハ長崎街談りて 関東に啓りて写す人  
のよやけりりしに甚ありしとこに書して其孝を感す  
。近せりたこゆを疫疾エキ流行の時身に帯ハ筋氣を達し

て家に入つて或はあつた凡そ諸物の臭気あるをふたつて此  
草香ありスサガ故阿蘭陀人ありスサガたゞ此は是れわづらひたゞ此の  
神玉久し現ありて門下に葱蒨の類と忽ち  
印の意いや凡そノヒレ瘴氣をこゝろ古事記日本  
武蔵足柄の山神を壓したまひし事より起し

○前將軍綱吉公御贈位官

御位記の写  
正二位源朝臣綱吉  
右可贈正一位  
中務内事雄文外奮夷武徳業光三合恩惠

治万邦宣授贈爵旌電章可依前件主者施  
行  
宝永六年正月二十三日

無呂中務卿邦永親王 宣  
從四位下 中務大輔臣藤 朝徳亮奉  
從五位下守中務少輔衛少 訥十原朝職承

宣命の字

天皇我詔旨良万止故征夷大將軍右大臣正二位  
源朝臣綱吉仁詔倍勅命乎キコヒ聞食ソヒ止宣布勇智  
兼寛仁久武正政治志一天太平亦四海安寧  
多項聞疾病難治性壽有窮以終以薨以仍贈案



号利殊感<sub>ニ</sub>忠<sub>ニ</sub>功<sub>ヲ</sub>布<sub>多ク</sub>故<sub>ハ</sub>是以大政大臣正一位<sub>ハ</sub>尔  
上給<sub>此</sub>治賜<sub>布</sub>天皇我勅命<sub>年</sub>闻食<sub>止</sub>

正月二十三日

宗号

常憲院

勅使正二位内大臣藤原伊季<sub>兼</sub>

宣命使從四位下少納言平時春<sub>平松</sub>

奉勅

大樹公薨去之由事

禁裏河所方<sub>口</sub>令言上<sub>ハ</sub>處<sub>ニ</sub>敬<sub>シ</sub>言<sub>ハ</sub>以<sub>ハ</sub>並相<sub>ハ</sub>河  
廉中<sub>ニ</sub>為<sub>シ</sub>証<sub>ニ</sub>然<sub>ニ</sub>致<sub>シ</sub>ハ<sub>ハ</sub>棟<sub>ノ</sub>嫌<sub>ニ</sub>之<sub>ハ</sub>程<sub>ハ</sub>リ<sub>ハ</sub>言<sub>ハ</sub>聞<sub>及</sub>之<sub>ハ</sub>氣<sub>ハ</sub>  
之<sub>ハ</sub>河<sub>ノ</sub>方<sub>ハ</sub>以<sub>ハ</sub>之<sub>ハ</sub>後<sub>ニ</sub>

正月十六日

重條<sub>ニツタ</sub>

保春<sub>タカノ</sub>

小笠原依波<sub>多</sub>俊

如多伯耆<sub>多</sub>俊

傳奏自状<sub>字</sub>

大樹公薨 去し中一絶 其後以正其方而極其  
定規中交いしを正しく沙汰ふに極其

四月十六日

重條

古屋相模守友

保春

秋元但馬守友

同

大樹公薨 去し中一絶 其後以正其方而極其  
並相公の幕中より極其

程より叙いしを正しく沙汰ふに極其

四月十六日

重條

小笠原佐渡守友

保春

如女伯耆守友

河遺物

尾張中納言殿 沙眼 一應 四家 代官 言取 沙史 古屋相模守

水戸中納言殿 貞宗 代官 百露 取 沙史 秋元但馬守

紀伊中納言殿 貞宗 代官 三官 取 沙史 古屋相模守

水戸中納言殿 大隅 局 取 沙史 秋元但馬守

切實宰相後ト 内根先 事あり 榎地對 沙文

同女乃後ト 同 引先 休之 右ノ人

右元二月晦

○東照大神宮の御花押乃此字と可也ましく或人曰く  
殊に字にて廻らばんを絶の許氣出の雜に象承文字  
あり春秋傳項氏家説のことにしめしめ此字注ありを同  
字ありと流る予ありこれ甚だ撰と云へば其の  
況と他もわたり 史乃の字沙判ハハハ 沙家傳本の

乃の字大黒として一筆書の大黒天神の古益あり神君を  
撰して御花押と云ふ其の條ハ尾公の相傳ありと御座  
まこと可。沙事ハ御家の後代のえりてハ何れも

○ 霽利 俊性人ト 卷 卷の字也 姓 姓の字也 吉田 福の字也

△ 音思那言也 又私の字也 公 公の字 乙 音壘土と増して 精と為り

又 再也 又 友の字 又双 音若日初て 東方に在り

石 砧 音諸 石の音 石砧 音雷 衆石の狀

○ 法曹至原敏曰喪葬令云服紀本主一年 謂文字 家令等

不在此 今ハ主人の服假ハ事ハ一死ハ主人の子ハ十日の  
制限 忌中家人ハ一ハ慎ハの主人の爲に後ハ古法ハ假ハ  
又曰ク假寧令ハ師經受業ハ人喪給假三日 謂師者  
依律已成業 者是也 私学亦同ハ

その在俗師の假俗ハと不事ハを蓋ハ公家の  
印後世の武家に成業之師勿ハ死後ハ其ハ学ハ授ハ  
りて經史と受ハ又流及の將士ありて門生とあり  
わこれに習ハ業ハと成ハ一ハ禄ハと受ハ故恩に依  
て子假と給ハ世子ハありて假ハの少ハ  
る中假又武人ハ馬ハと業ハも若ハ馬ハの師死  
る時苦心ハありて終ハ文字ハの師ハ甚ハ重ハ  
武藝の類ハありて我ハ業ハにありてハ  
恩の厚ハ人ハにハ心喪ハ三日ハの假ハありて

○去年京師回祿の時紀ハ遷幸ありし一ハ方ハ清心ハありて  
同ハ一言ハ傳ハて浙ハ歷ハにハありてハ仰ハありてハ  
権大納言實業ハ清水ハ所ハにありて三位ハ公長ハ早ハありて  
ウハとハ

凡平ハとハ名ハつハきハる  
コハけハらハれハにハ公長  
清水谷ハをハやハとハのハこハとハ  
人ハよハれハとハはハ教ハ意ハとハりハくハ入ハるハとハ

とや帝宮より詔教大梁をよしけりぬは数代にあり  
て録りし行在りしをいへば優りぬるまは此のたけ  
ありぬるをいへば又詔教文筆と業とありし人此  
武士に考へしを騷動たけしき氣縮まり威後あり  
ハに震ひて一物に絨塵を執りて不燃ハ武の必にこ  
き畏懼の高賈と等しつるや何れ馬に熟  
用深兵要と曉りて報國の忠あり人小環をハ不  
我人常にこれとぞありし

○或問聖經漢皆古文字なりと何の時今のとき文字にた  
れ改しむる答集氏筆乘曰六經本皆古文字唐天宝三年  
詔集賢學士衛包改古文字作楷書云これより雜書  
亦くありしとや

○或人曰吾子先寺院の二王と兩金剛といふべき由り也  
經軌の説ニ像の多れ如何答出家論と按右  
金剛左輔密迹といふ者此兩金剛ありて二神の像を  
左右に並

右彌金剛ハ俱舎疏に所謂那羅延これより人種神ト  
譯此神天カト一切の惡鬼と驅天刑星の像此神項に安

○阿彌陀淨土三曼荼羅无兵寺の智光感得當麻寺

法也尼感得超勝寺清海感得也當麻の變相世に流

布して人普知之超勝寺此像不見之智光掌中の

曼陀三尊

阿彌陀合掌二菩薩八當麻  
似たり觀音左手に宝珠あり十七菩薩  
右九舞下臺音

樂の并四舞

左二舞右二舞哥舞并二体比丘二舞頻伽鳥  
羽ニ新生の

并等あり上に樓閣中に宝樹宝幢等あり尚麻の變相

比しては甚畧あり

○或人麻利支天の像と問  
予曰今世見像大威徳明王  
一面して鋒ヲ團扇にして輪宝と

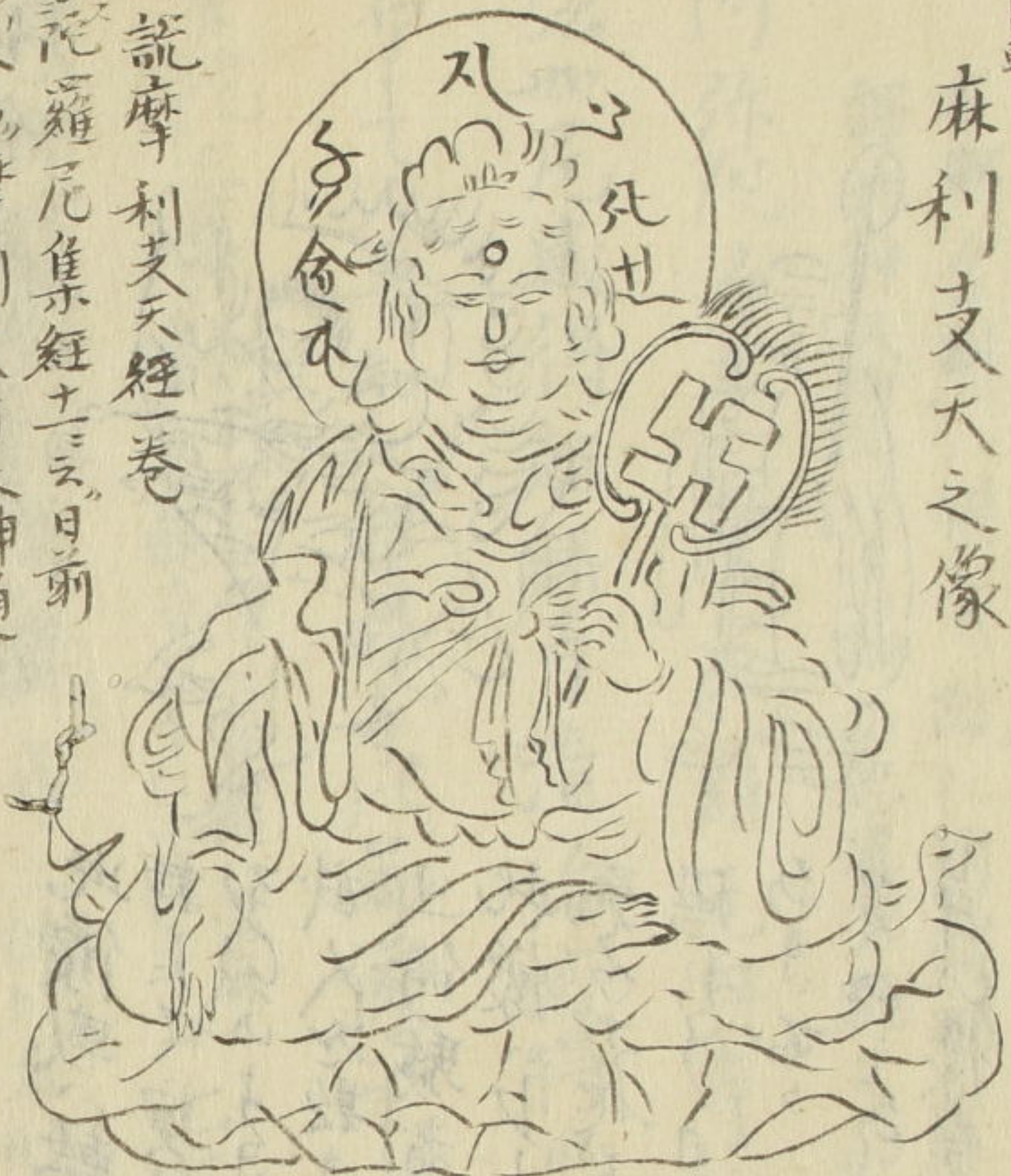
鋒に持てて牛と象に之たり是と俗傳の像と云ふ  
密家相傳の像に形也

俗傳麻利支天の像



此像或ハ輪宝と舞をうもつ又  
鋒にて安所と作らるも阿の  
刃のよきやうにして事と云ふ  
武人と欺きし者也是五川邪流  
且倚鞍者より作らる像也  
此像ハ少儀軌とし足るやに  
是のよきも右牛と象と執事  
溢れり且九牛の鋒亦凡傳に  
あり也  
是のよきも陀祇尼天青面金剛  
等の像今誤り作らる

儀軌  
麻利支天之像



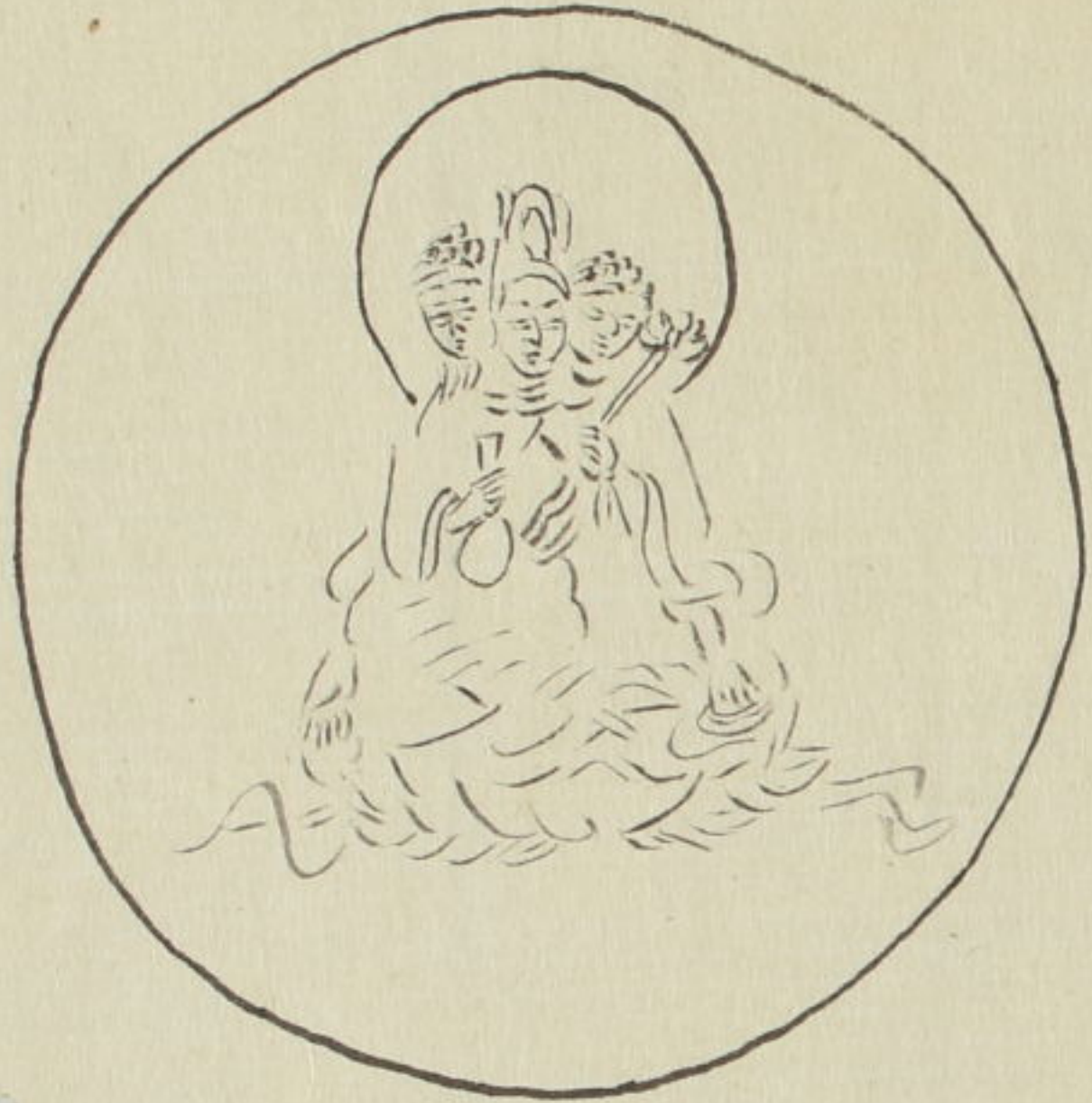
是小野廣沢流傳  
の儀軌の像にして外  
別形に麻利支天の漢に  
威光の譯に三摩耶形  
を扇より根本日輪の陽  
火のうちに甚習ひあ  
りたり軍家者流の邪  
佛等のごとくにあつ  
たゆめお方にふりま  
るゝ家への備に存して

佛說摩利支天經一卷  
撰陀羅尼集經十二日前  
有以天名摩利支者大神通  
自在之法行前日不見彼能見  
無人能見無人能希等  
又咒三首經有摩利支天咒  
按其形像天女而非明王夜叉部

○梵名 翻訣 三摩耶形 種子 道場觀 印 明

右七種の習いと知れりて  
妄に佛像也とせしむる誤也  
多し

○不空罽索觀音の三摩耶形ハ罽索也其菩薩像ハ葉



蓮花中の満月變して一弁と  
り 三面より肉色宝冠に阿弥  
陀佛と載りて右第一の弁宝  
鬘第二の弁念珠也左第一の  
手開敷の蓮花第二の弁罽  
索を執りて身に麻皮を服し  
て蓮臺より光明赫々とし  
て臨天に侍者多し 儀軌  
に及ぶ

小野廣沢正流

南都真福寺南円堂に安あり此像ハ三目八臂之  
 是ハ弘法大師唐に於て別に傳受の像あり  
 又六臂乃者あり右の上錫杖下、知瓦の上蓮花下  
 満願印本手ハ合掌也  
 又二臂此像あり儀軌に依て同一カドを承宗の書に  
 委し〜又〜

○十一面觀音 耶舍堀多の譯と玄奘此譯と異あり又  
 不空の儀軌別也二臂經四臂軌の相あり長谷寺の像又異あり  
 ○馬頭觀音 八臂此異あり我尾列龍泉寺の銅像ハ二臂あり  
 ○千手觀音之亦異像多し清水寺の像ハ十ノ外五ノ佛  
 と捧ぐ  
 此ハ觀音部殊に色して一カド經軌等  
 の説と可考あり

○文殊九手に在りてり〜今や〜又根ハ



蓮花上に梵篋と作り一カ  
 也善賢に蓮花と持せ  
 一カ或ハ如意と執りし  
 と本款にあり右手五輪瓦  
 手に鈴に佩えき也



○地藏右手錫杖と執りしりし亦小野廣決兩流の軌形  
ありども其施無畏此印あり 或ハ宝幡を持せりしハ  
其三摩耶形あり也

○大黒天神頭に帽と蒙<sup>カウ</sup>右に槌印左手蓑衣と執<sup>カウ</sup>  
蓑衣ハ  
直に槌と依り儀にのせ日本の乃巾と蒙せ  
布衣せりの販ときせりしハ俗俗の作也

○辨才天<sup>ハ</sup>右に<sup>ヤ</sup>鑿<sup>カウ</sup> 日本藏のハ  
に修非也 左手印<sup>カウ</sup>章と執<sup>カウ</sup> 宝珠に依  
ハ非なり  
右窓家にはつて其二三と流して博に備へるハ外  
區々たる形像定一とて流人ヤ万徳寺藏其祥抄に  
くりくをり

百卷の書きり

○仏者木とて立ておさるる釈迦此ときハ先師の形像と定て

其徳を謝し、意あり、其他佛菩薩等の下もハりて無

形の徳を表して其象と取て造し事あり故に諸佛菩薩

と相とる小克道場觀<sup>カウ</sup>其依法正法と觀<sup>カウ</sup>或其三摩耶

種子と觀<sup>カウ</sup>事定<sup>カウ</sup>形、顯密傳法の悟の外此等と不知を

礼拜<sup>カウ</sup>事し<sup>カウ</sup>ありむるや今禪淨土日蓮宗のよ佛

像此印を問えよ何事<sup>カウ</sup>と辨<sup>カウ</sup>へる法師多し

○或河荒神供密家此正法にありし谷<sup>カウ</sup>御音集に記せり物

あり、真言宗の信正法<sup>カウ</sup>の荒神供ありしつる何者<sup>カウ</sup>され谷





いハ修尼を志及抄者元正及び神々の日修尼  
暇入るる不修尼と云々推してソレハ神社の御宮の  
中ハ古きやと云々入すれりのみや

○ 魔道

魔王魔母  
魔民

神道

大刀鬼 飛行夜叉  
北行籍利

邪道

精灵 妖怪

毛標 巖にむり 神道の字易の大信に云々  
云々して巫祝ふは云々を佛書大カガりの謂也  
一して虚説の事云々云々云々云々云々

○ 起曰明經下曰女有之事隔少制父母出嫁制  
夫不得自由長大難一子是為三三

按是竊大戴禮之語為佛説

○ 大士仲尼

辨正論曰 明字 大日應云 大士仲尼  
即儒童菩薩 浮屠之書故談此類を  
不二矣

○ 釈氏火葬の誤供道が隨筆 賈同の禁焚及び

原林火等の書の篇にこれ云々云々の及云々此等

と滑て云々酷の極て云々云々云々云々

○ 釈氏天地日月星辰等の事云々ハ因本經標炭

經華嚴阿含正念處等の祇多羅及い立世婆沙等

此法為大槩妖妄等經の流説云々天地の理云々

て天文の實を辨(ま)りて胡礼胡語(こりご)ふ(ふ)る(る)者多(おほ)く一(ひと)釈迦天眼通(しやくぢあてんげんとう)有りて知(し)る(る)事(こと)多(おほ)く自(みづか)りて(て)い(い)ふ(ふ)事(こと)多(おほ)く

○ 吳邦の漢書ハ文字の訛(ひ)を分(わ)りて漢濁(わんじやく)を(を)りて(て)自(みづか)りて(て)い(い)ふ(ふ)事(こと)多(おほ)く一(ひと)漢(わん)の漢書(わんしよ)ハ文字(もんじ)の訛(ひ)を分(わ)りて漢濁(わんじやく)を(を)りて(て)自(みづか)りて(て)い(い)ふ(ふ)事(こと)多(おほ)く

之(こ)の儀(ぎ)を(を)りて(て)い(い)ふ(ふ)事(こと)多(おほ)く一(ひと)漢(わん)の漢書(わんしよ)ハ文字(もんじ)の訛(ひ)を分(わ)りて漢濁(わんじやく)を(を)りて(て)自(みづか)りて(て)い(い)ふ(ふ)事(こと)多(おほ)く

彼(か)の書(しよ)也(や)これ(こ)れを(を)りて(て)い(い)ふ(ふ)事(こと)多(おほ)く



○ 月峯水

女人月水也  
法苑珠林

○ 大覺

莊子曰有大覺者然後知此具大夢也  
教氏以辨謂大覺也尊乃取之

○ 昔上帝它經保生要錄等以居處の在處と宜と

しるる般多あり 我あ念狗ら 所の考後立が

妖証と受て懼ゆりしとほりなり

○ 清脩妙論曰齋戒沐浴此外清淨也息心玄妙

此内清淨也

按妙論云此内清淨外清淨の名目をたて我々の及のこころにありしを道土は馬が言ひたり

○ 内宮

過現因果經に普光佛の所を内宮  
と云ふ所は内宮の所なり  
我々の及のこころにありしを道土は馬が言ひたり

○ 過書

京師 新波等の城門入の重箱と云ふ又著經  
帆の事及び布高の運上と云ふ考の事あり

○ 法列 年藤郡宇多院村の老俗に之宇多院遊幸

した多いに故色名を町いふ邊社新橋桶敷をとり地

向うは法流の社境内ありて彼院邊流なり

所ありと云傳ふ又橋野村の門の裏の裏ありて二

社あり傳へ曰毎歳二月朔 社をます小祭りと遊び

仁王寺の改修村一日の飲食を乞ふに子孫の賜  
回と呼ばれ村より始り家後村を流る又三月  
西社の神輿とあり合て参り田舎の俗人の  
〜記あり

○尾府下東平田院平岩主計頭弓削親吉朝臣  
香火場也始号明雲寺在丹羽郡大少高田流  
僧守之親吉捨二百石地施入之  
○明正天皇外祖母一品宗源大夫人

浅井備前守長政ニカ也其母平信長各伊賀守女  
長政有回子嫡子某為信長被殺二回江加  
坂田郡長浜村福田寺僧也本願寺長政卒後  
後室嫁柴田於理亮勝家天正十一年四月  
二十四日與勝家共死于越前國北庄城自  
此先勝家養長政二女為子於此使富永新  
六郎某送禾乃吉之陣所其後一女幸秀吉  
生内大臣秀頼二女始為仇治某妻秀吉棄  
之念嫁丹波少將秀次少將卒而後奉仕  
台徳公誕東福門院一説長政  
右所見古家藏書也書以備遺耳

○中務卿之宅村牛頭天子祠あり是海東郡津福社  
如ありと改之毎年正月二十六日津福般若轉讀の



日之宅の初友一村の民を幸ひて神饌を酒齋  
はゆれば亦引て祭之（此の村あり）始はゆふ八神人  
ありしとや之宅村天皇の御小履石を般石あり  
て之始て流石の處と云傳へ侍

（此の村あり）

中嶋御園 在中嶋郡今為春日井一是大神之

中嶋神戶

延喜式尾張國四十一戸是也

中嶋酒見御厨 今酒見村神明社有古陶壺  
皇子汝以文謂酒見御厨是也

愛智一柳御厨 今稱荒子村今猶有柳庄及  
御厨之名

是等之地今皆有神洲祠然無調庸田祖勘  
納干神宮只存其号而已

我 先夫人 （千代） 五歳の内時津婦と云はれり

贈相國 （家光） 其名盤とまひてたまふ

（此の段をよめまひて）時盤上にませまゝゆはたぬ安かり  
源氏養の是れ後より葉のくく其名盤の上よまは榎原  
りふゝあまゝ家ありむゝは質朴の申とてこれの  
やにたれは半是のこゝをぬる

○ 前持大細之忠幸卿ハ後陽成院の令身式部卿智仁  
親王の之男あり 寛文三年源の姓を賜ひてより為幡

と稱して清華にほろろ多し

○ 後之條院の内侍よりハ皇子乳母親王直母也  
此子法親王なりハ白河院の皇子仁智の  
覺りハ之も法親王とすも死也皇女親王宮下  
と極て之の内侍よりハ内親王始なりと也紹運  
録に在任内親王文武皇女井上内親王聖武皇女不破内親王  
道理三人は酒人より前よりハ内侍也此ハ  
死すたふのまつたもつと後世に内親王宮あり

なりハ京師八所御冥赤一在任聖皇とは別在任  
内親王なり 天年元年終死ハ今世少皇宮  
一在任在任の大任よりハ高深よりハ凡廿八所ハ  
と相多しハ在任何の在任也且崇道天皇  
の上ハ人臣と位せんや人又察せよ

高野御冥 早良親王 京極下御冥伊豫親王 京極上御冥  
吉備内親王 綴喜御冥改屋宮田丸 下挂御冥 橘逸勢上挂御  
冥 火雷神 延喜以後所祭

按五代實錄清和帝貞觀五年五月二十日  
於神泉苑脩御靈會下部兼俱以為牛頭天  
王<sub>王</sub>也。是依疫疾流行百姓多斃而設此祭  
事。故云大小如八所御靈者。朱雀院天慶二  
年所祭云。

今宮御靈

一條院正曆五年長保二年天下有  
疫故祭之祇園<sub>祇園</sub>一體。然則古祇園  
名御靈唯祭疫病神。依天刑星之法。欲以此  
稱其神而為牛頭天王者。原親氏之所為也。

○乙酉四月二十九日遊二見浦

百尺碎虫者

吼鰲奔怒雷

晴嶽昭海浴

幽鴻吐雲開

袂拂神風索

珠坊重波回

轉頭望土嶺

窮眼白雲堆



